特 1
2426

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426

ガラス使用

特1
2426

秋野七草考

角田川
梅隠鞠塢居士撰

萬笈堂
文剣堂 發兌

帝国図書館蔵書

七草考序

門川

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426

とゝ楽もべくまでこんとするまれ。つうかんを新ふ
あることおゝむ。かのり後こゝ西湖のもをまくおもる
ことなりとおぼゆ。もゝのうちよりあだいともまさりて
ある舊跡あり。古今集小在中将乃いざ
ことゝんとゝふおもば書よふ不の隅田河。
すれをもこゝふて。菱系氏の女芸紀行あり。
あをこ河のとうまで。今須田とい(訛)るかあをでのよと
るまきるふるん。おのれ鞠宇がさぶと(性)て服をよ
ふけるの癖あり。仆角田河のつゝみをいこゝもさだ

して堝廬を結ひ。彼孤山の和靖が賞ふるのこゝひ。
梅三百六十株をうゑて一樹を一日の用よあつ。
みのこゝまれりとこゝ生漬を呑む。おゝふ
長流を汲吸て。茗を煮て窻のうちよ玉壺。
ゆづゑ杖を曳く池のめぐりて逍遥を。園中
四時の花あり。時こゝて匂をぬと折。籬乃
小草のもえ出るようして。物の芽葉の霜干
埋るまでいろ〳〵の色もざざ。梅のよ後も
さこるの楽。中鴻あの桜か魚でひ。ほゝたちを

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

河骨。萩。おみなへし。芳宜山振。軒端おみなへし。藤ばかま。
根あやめ。菊。刈萱。遠水あやめ。菖蒲。かきつばた。我の
千ぐさをぐくいづこといふの。もあるべき。外
第。菜集よりめれ草。名詩よいつる木。敷あまた
ありそうろふ。て四時のりてあそびとぞ。かきつばた。我。
家の名。梅が屋と呼び。園の名を百花園といひ。
又の名を秋芳とも称せしはありくれをうふ
つけて鳥虫のけり。るか学るさぐも。郭公ひ。
呼子る。虫も。蛙。せみ。きりぐす。鈴むし。まつ虫。

をあつめてのくねぞるれ。さんがらし。
いろをもとまりとのみおもひ。春乃様も。
園中第一の奇観とやいふべん。秋のくさ。園中
第二の好景とやいふべん。秋のき。鶺鴒は園中の
木ぬ巣つくひ。おのづ。
来ることのごとく。考へ生せる。
かりぞ。そこくの中より取り出る秋乃
七くさの芽。ぞく一まことはりふとうそもく
さの秋の七草よ。まこうとをふむ。

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

せしふうふ云々うる人もあめまどさるあめ
ざるべし。春の七くさよりはこの書ようて
邪氣をうみ爲のりの多紙。秋のへ万葉集
小哉る山の上の大人の歌よりつる草乃名を。
うぞふまべ。ゆゑて七草ゑの人れ七くさ
とふうちまうなていふこと。なりさてこのはみを。
おのま線字ざ〳〵らふへおくぞ。をぐく唐乃
大和の書どもを考へんせて。まれ〳〵ふへおのれ
きくうが僻案をもういはひ。花よ。

指人の道の栞ふもが邪とて。物〳〵まぎよるん
あうりるさへ〳〵。花つくりの翁が草　養ふ
いうなのをそひ。ざうのまぞ。そうきひごと
どもぞ有るめるけあこえんまうんへよく
まぐ〳〵。ぐ〳〵ぐ〳〵。
ふとやくるん。

秋野七草考

葛飾　梅隠北野秋芳菊塢　撰

江戸　櫻下中村曉河　校

江戸　筍齋閑禹麥　合

萬葉集第八

山上臣憶良詠秋野花歌二首

秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花　其一

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

其二

波木ゝき

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426

ガラス使用

七草考 上

[万葉巻一] 引馬野ふにほふ榛原いざ子ども早く日本へ
まるしふ其の外集中榛と書るところ多有り 契沖云榛木は
そんの木といふ武士の氏よ榛谷といふも是なり 片山里乃
川邊などふ多き木なり 昔へ榛摺の衣とそよ死人もまの
皮をもてそめるこ萩ら花摺といふもある有よ榛と萩と
よくおれるより真淵云ある人榛と書しい秋さるよあらぢ
今そんの木といふ木もそその皮子をもどりて衣を染べいくよ
又秋花さくをが皆芽子とうれ又寄木に寄榛などの題ふてある
歌もことふ榛と書り云く真淵考るに右いうさぐの理りをのそ
おりひてふらくたぐさうりり 先巻八よ白菅の真野の榛原

心もそらぬ君が衣ぞする又古へよ有けん人のもとめつて
衣よ摺しまの榛原巻十三四よいざこども早く白菅の
まの榛原手折てゆらん 此巻ふも榛原とうり 巻七よ夏詠榛とそうり
こぶ衣もうんまにうひ乞鴻の榛原秋不立とも山外ふもと
あれど歌の意も總て秋さきこ何ぞといつぐ仰委ふも多くて
且なうつくやぬえんの木の枝を妹ぶ為よ折て来んともおりはえぞ
巻七なるい夏ふて秋さぎともみ〔と乞い秋さきなうとぐく
仰のあらん此引馬野のさ乞れる花なぶ入こぶもとも衣よ
色のまふひうらうえん古へ人も有がまにこそ歌さよみ
ん皮なぶの汁りて染て木の芝うとて即ふほのさき

原とよめんや云〻只此なぎふ定むべき字なけまこそ榛。
芽子。のさなゝべ。令式などみな蓁と書ふ仍〻字よ
かゝて皆花さくなぎことすべきこと榛と芽子をあれがちふ分んと
なぎゝやせん木たさゞ本立ち枯ぞ〻て春その木より若枝おつり古今
集よ古枝さゝける花それとよみ本あゝのこそぎるどのひゝ是ゝ草なぎゝ
冬ハ莖ゝ枯さく春土よりおえ出めりされどそまでを
おひて字取書分ゝといもわえぞ上よりる如くてあるべきおり千蔭云榛ゝ
今の花さく萩ありと翁ゝいへまこ先人 枝直 説集中。芽子の
歌百五十首餘有く皆花の咲散るとよみ雁麻又蓼などの
よみ合せふ榛と書ると針。波里。などの書ふ十首餘ありて
皆花をよめるものなく雁麻露などよみ合せるもみゝ
されぞ榛ハ今の萩よおもぞ波里と訓て今はむの木といふ

ものゝ汁木の皮りてそれバようくうるものなまこぞ古へ
搦漆ふせゝるべゝ契沖が説よふるべきよゝいふ宜長の
説ルきふ 衣服令 ふ蓁とおるもはゞをふくたんの木ある
よゝもむてれを御説もあまべいよふ先人の説よまこがり
万葉考 攬落葉 ふも榛ゝ今の萩よおもぞるよゝゝこゝゝおひづゝ
へり 和訓栞 曰 日本紀 ふハ榛字蓁字のど弘用てそうとも
かゝぞとも訓ぜり蓁も榛ふ同じ潘岳詩よ荊棘成榛と
いへバかゝりハ針の義るべゝよそ 万葉集 針原とも書せり
んぞふゝりの木乃略るべゝかゝぞとのハ木萩の義今
さゝぞといへり 万葉集 ふ真榛といへバ物ふして顯昭の大

萩とつくるも同じ云く同種より夏萩あり花の時をもて名つく

白花あり花入ありさんべ【体源抄】ふつふつふぐく本類あり

草類ありてさりふさきるんべ【万葉集】ふ本類みそ榛を

かり草類ふは芽子と書せるみやぎ奥州の宮城野信濃の

山路などふいと大いる本もあり弓などもつくり

榊よ青き枝生て花さく故ふ宮城野の本あり七夕祭とも

よりて本のあふいる意ぞりと我又年毎ふ刈りく者そえ

出るが早秋ふ高く一ま傾りもて打みだれて花咲りとも

いり【宗祇旅日記】よ本あふのさふふもよめさべ春刈のこと

たる去年の古枝ふ咲ふ秋ふと関着ふ宮城野ふ

榛 ハシノキ

檞 カシワキ

花ハ松のそれふ似ふり冬花咲夏末秋の初子を結ぶ実ふ形丸ふふとふ陳皮ふりちいさ又山茵子とふふも形ふふりての冬のべ

真附の文字を

あふふりとあふとふ里有て父母ふ離ふる萩の

たふり枝ざるべての萩よりもそふくくあべくりと

いふり又曰榛ふ今のそふ本ともちんの本ともひて陳家の

用ふ入る物あり諸國の田間ふ多くく殖さり是ふ花の賞と

べき本ともあふ歌人の詠ぞべき品ともえんど【日本紀】の

蓁擢衣【万葉集】の榛原手折て初んとも衣ふ摺せともある物ふあふべさん

名所ふもあまえく蓁原をたりつとよみ榛澤をふ

そんさんとよめれそれ物を指ふや杜子美ふ檟林礙日ふ

吟スニ風葉と飛まるふ色ふりとつり南部よりとふ

ヲ用ひ一説ニ云ふおのれハよろづ

也章考

代実ニ尾張ノ人ノ深家小用ト又曰ク史貨殖傳ニ千樹萩ノ注ニ梓木ノ名ト見エタリ二令字ノ意ヲ以テそれと訓ゼしや菅清公尾州記ニよれバ田ヲ森本田ト書せしヲ埃嚢抄ニふんえうとりかへてよびそこなひたる誤ニ従ひ古へより漢名さざうノ類ニもあらず

救荒本草胡枝子俗亦名ニ随軍茶一生ス平澤中ニ有ニ一種葉形有リ大小一ニ大葉者類ニ黒豆葉一ニ小葉者莖類ニ著艸一ニ葉似ニ苜蓿葉一而長大花色有リ紫白一結ニ子ヲ如ニ粟粒大一氣味與ニ槐相類一性温

花史観音菊天竺花是也五月開至ニ七月一花頭細小其色紫葉如ニ嫩柳一其幹之長與ニ人等一

和漢三才圖會天竺花如ニ言ニ于花史一案枝葉長而狀似ニ絲糸一而攅一極三葉其葉似ニ棗葉一又似ニ南天燭一秋而不ニ尖柔軟一秋著ニ小花一淡紫色俗專用ニ萩字一奥州宮城野方二十里許萩生茂有ニ山萩一有ニ白花一者有ニ白紫閧一者

和名抄鹿鳴草爾雅集注云萩一名蕭萩音秋一音蕉蕭音霄和名波木今案攷名用ニ萩字一萩舎是也辨色立成新撰萬葉集等用ニ萩字一唐音芽音胡誤反草名也國史用ニ芳宜草三字一並本文未詳

今按ずるニ史記山居千樹章註一本章作萩又曰淮北常山已南河濟之間千樹萩云樂彦曰萩梓木也可ニ以為一轅者

爾雅 萩蕭(シウセウ)也 通 楸(シウ)木名也 やまびと萩蕭楸ともふる邦
梓(あづさ)木のうち去るふ萩をえ死と訓せ一ふたえ死え秋えさく
草のえんが仏つえ一きをりてかり用ひようとする
小萩の訓ありとのべども芒ハ周煌(うるわ)かの國へ使者ふ来ようし
後よ仰まる書のえんが琉球みそも我國の文字よ従ひふる我
其まくよ書るりのふ後二千ふてのりそえ死を萩と書ふ
あふ
糸(いと)をぎ えこまつのねふして盛りひさしうろくたるこをを
うて名づく 久安百首 待賢門院安藝 風吹もまだきの糸萩ふる毎(ごと)ふ
ぬく玉の糸ぞ尚(なほ)ぬ さを糸よりかくるも 家集 能因法師

錦ふもおりつへくもひが宿の糸よりかくる秋萩のえい
のく萩 糸えきこ 古今物名 うつ埠のふらいきごとよそむ
きぐたまのりくをねぞう邦くをれ
玉萩 玉もえの清くふる紙不もるりゆき乗乃おさ
ひきたる紙こそそもりふ 夫木 かもくよ月のひりも
うつりけりを有明の庭の霜れ玉萩
りとおくのこ萩 りとのおくふる木萩なり 古今 こあぎ
のえをとをくのこ萩をおりこ風をまろで君死こそもて
萩の花つま 麻のふるりのふえ一ふ萩を麻(あさ)の妻(つま)そいふり
資治百首 蓮性 人こ反草だの床乃家のふ上ふかうを称る萩が

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

花つま　枕冊子　曰萩もいと文の穂ずゑの紙いと
朝露よねをそるのよくとひろごりふしたるほどなどらんも
萩が花摺　萩を分ずが衣よ文の穂ずゑの紙いと　覚月詣駆
ずがあさの袖もうつりけり　衣きつゝ
萩の葉をうのかり衣ともいて萩
ずりのみるべきふみや　夫木　後鳥羽院　雫まだきぬ萩の葉摺乃
かり衣不さでやさびのやさふもせん
南京萩と稱するは小之日光萩と称すふもありて花観
べし　築波萩と称するありめさだともやさだ萩ともいふ

みだれ萩　大きだれるより別ふ草萩と称するりの一種又
仙臺萩と称するりの花黄ふして豆の花よ似りまさ
そだの葉乃だにて葉さだふ三月花さけりまさ
一名野決明とのふ又一種冷歓木のさて夕ふの葉さだむ萩
ありまだれ萩　ふも代萩あり古くより代萩みゝとのふ
八雲　ろゝ草　和名抄　鹿鳴草の字を用ふ春よ代名あるべし
家集　教長　都ふも咲旬へども春のうく名よおの草ハ秋の山里
月見草　同野の字草　せ死もるの花代野の花を野字
草まりのさひ初咲あるつるうれ
莫傳藏玉　初見草乃ふ春もふて季もふあるの初見草さのふ夏

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

の萩とおりの小
莫傳藏玉 庭見草 花紛れ知らぬ
人のおほさよ 藏
藏玉 古枝草 宮木野や雫も久ある古枝草こその秋も
花を咲くり 古今秋上 秋さ死の古枝小咲る花それかりとの山へ
ひさしぐさかな
莫傳藏玉 秋遲草 秋ちくさや花咲る此野おほとりの集をかう
ね斗小 莫藏玉傳 濃染草 花さけ小法をる死人もこそめこさ及ぶ
めそくさのやとのこん 莫
りほ さいたるを 袖中抄 さいたり初萩をいふらさら前るり

たる萩るり云く

乎波奈 をなし

薄の穗小出る秋いかさら獸の尾小似たるを名尾花と名
けくとの真闇云をそれを男花るり 万葉集 小須々志
競とゐれを壯士どもの相いさをいひ祝ふ
伊須比比てゐも荒ぶる神逢の須さきも
物よく高く茂りて雄こそれを名づけ
ゐ男花とゐをとこをそれの花とある也男女郎
花をもつるり 仙覺抄曰 万葉集 云美草ゐ落し真闇
云美草ゐ真草とゐふ同くて秋の百草をひふ宣長

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

云義草いをそれとよむ〳〵 貞観儀式 大嘗祭條小次黒酒十缶ニ以義草飾之とそえたり 延喜式も同しくこゝも然きびやるべし一種の草れ名なり右いをそれを義草と書るよ〳〵るべーとゝり巻八裳十のどふへ草それをそれと訓ぜりをそれを秋萱の中ふく專ふるものなれぞなり

爾雅 曰蓮草葉生曰薄又曰蔧芒同杜栄也

新撰字鏡 曰蔧生木ニ曰榛草蔧生曰薄也

時珍曰芒葉皆如茅而大長四五尺甚快利傷人如鉾又七月抽長莖開白花成穗如蘆葦花也

三才圖會 曰芒芭芧杜栄俗作薄字

和名抄 曰薄新撰万葉集ニ和歌ニ花薄。波奈須々木。今案即厚薄之薄字也見玉篇ニ辨色立成ニ云芧和名同上ニ今案芧音千草盛也見唐韻

ふぐのをそひ 契沖雜記ニ云赤染右衛門集ふるでしこの薄ふなりたるねうへく おひのうれこやさでこの花をそ死の移ろべ人ものさてふんろべーこれいなでこと云ふをそれのあり方変じて落ちるさまをいふ又ふのそーこれすゑなりをそれのそーとそれすゑなりをそれのあらわるさまをよめるをそれのそーとの薄ふのそーとのをそれなりとそれすゑなりをそれのそーとこの

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

茂生〳〵る狀いふなるべし 長明四季物語ふ放免カ下人の袖たゞとふ語けさるなりのをいふなりとあるどけしからぬ人のなりとさくされもの百生瓢のさげくもゝくとさく花もゝ人のをるさまをふよりの山風よすゝきにさく夜されねの狂とよめり

摂津國風土記云雄伴郡有夢野牡鹿語其嫡云今夜夢吾背尓零於祁見支又日都頒草生多利止云ことのひとゝき草生さりとい〳〵るも一もゝの草生さりといふがとゝきく

日本私記ふ薦スゝキと訓ど字彙草綱曰薦ト云ゝ乾ホを合考ふをべ一草の名のをふあらいふべし此等のとより叢生さるなるべし云ゝ 日本紀 蘆荻の字共ふスゝキと訓ぜしもいつまも茂生さるりの名考ふよめるなるべし

白ゆふを花 夫木後九条内大臣 心りとの野原よまぐれそうせめの白ゆをそれ秋風ぞふくをそれが波をそれが袖さりふんそいふり 不及證歌

糸薄 葉不そして糸のごくさりて名づくさ穂を糸ふさてよめり 續古今太上天皇 いとそれこるさかふ柚垂てあさる家の玉乃をせんまさかむけの糸とも

新六帖 衣笠内大臣　秋風の寄るみざれぬ花薄ほのぼのみえし袖かとぞ思ふ

夫木 衣笠内大臣　花薄ほのぼのみえし袖かとぞ思ふ

ぬれおくぬまぞ　まさきそこの糸とも

そこの糸をよりかけて玉をちぎぬく秋の雫

まさき薄　袖中抄　曰花薄れたとなと同じひさこ　万葉裏書

ふかさ薄とは穂の出て旗をさげさるふうなるをいふ

とぞ紙用々々るとぞ云ふ　真淵云秋の野の中よそれもの

物より高く顕まそ榛も長くてなで有るれば幡をそれ

といふなるん又皮の字を書さるふうなれがえさのさを濁りそ

霞の意そ一穂を皮ふ含そて開ふ開生るるれべしぞ

をそれといふらんともおぼゆ　万葉巻　軽皇子宿于安騎

野ニ時柿本朝臣人麻呂作歌

ひさの秋日のそこ暑そもれふふ秋の大野よそそそれ

ーの紙おーるべそ

いと薄　岩ふ生そる薄う　家集　吉野川一本そそる

いそ薄　約そる人の袖うとぞそそる

はーそろのそそふの薄　向くそでそそる薄をふ

羅紋ともそ鷺の羽をそれともいふ　類題　刈り人もえ

ぬ形を原よ着そのきりふの誰まれくらん

そろふの薄　そ穂さりんあそる薄をふまそ焼野の

薄ありともいう

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

をみなへし　たてよろづ〳〵文あるを以上證歌未考

鬼薄　快利而傷ル人如ニ鉾又芒ヲ

りとあ〳〵の薄　りとあ〳〵の萩ふ同ど　夫木大納言資季

よび人ろふ〳〵む野べの秋風ふりとあ〳〵のをゝさ

ゑこぶきろく

このれをゝき　かまくされ薄をつふ　新六帖内大臣　嵐ふく

竹のまろ〳〵の拍落そよ〳〵淋し一有ばの月

をみなへし　をのゝを落とも　万葉巻七　いもうと

我うひぢの細竹為酢す我しのぶるごとをびけ細竹

原ゑを小竹ろり此歌ふくこれぞをみなへしのをゝさとふ

ふをゝ死の一種の名ふへあ〳〵ぞ小竹の叢生〳〵るを

をみなへしのをゝさといふごー下モふるびけ細竹原とことわり

たるよあを〳〵なり

篠目草傳　露曽草　ワび宿の庭ふおー〳〵るを雪かと

よるはろ〳〵風や吹らん

莫傳　數波草　引ろす風こそふそよそ波ふらで數

波草ふ雪ぞこぶる

莫傳　みぶれ草　藻塩　袖波草　是ハ尾花ことゝ〳〵

袖ふり草　隣女集ふ焼野雉　やけ残るかさの〳〵原をワけ

わび袖ふりふろをみ〳〵ゝ焼残るうさの〳〵乃

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

村をゝこのむ陰(かげ)ごやさゝをるくらんとよめる歌ふるび
出せり袖ぬるゝ露の落るより

そぐろの薄　春やけさ霞の底(そこ)の黒(くろ)むまで

後拾遺　堀川百首　曽丹集　等まふこゝえよう又をぐろともを
そぐろともよめりとい　万葉巻八　小春日之開乃手
為里とある誤字(あやまり)をそのまゝふよゝゝ

まそ尓の薄　伊勢之記　長明　日をへつゝさゝをる人もなくらし
たりとゆふ人もなくらし

まそをの薄　伊勢之記　長明　剛妙(こわ)のさそをの糸をくり
さゝ〳〵まろさふさゝ花のをもそさ

まそそうの薄　伊勢之記　長明　秋ふかみそをゝ雫(しづく)より後の菊のもと
露(つゆ)くまそそうのをゝ花おそる

長明無名抄　曰所のありける日或人のもとふおりのともさゝ
葉(は)うて古今(こきん)などゝ語出よりける序(じょ)ふさをのまそさ
とゝのまいりある落ぞるなどゝひまそふ不ど弐老人いろく
つゝのぐとゝころおそはるひぐらのありとを
さ待りゝとかのくらひ出よりゝ登蓮(とうれん)法師(ほうし)その
中ふおりて出る紙受て涸(かれ)をくるのふなくて又そのことも
をく書(かき)ふそのかさゝべゝ〳〵給へとゝのひ乃まびあゝと
おもひなのぐとそうて出よりゝ物語(ものがたり)をも少さゝてそ乃

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

うちさゝめごとなどいと急出くる狩人くあや
がりてその友をつれてこのべにふかうわ
おりひもすへて死まれる人ありときゝていそぎ尋
まうでゝさらんとのゝ翁るゝなげ
きつゝといさゝかけをどりでたるのみにて死も寔
命ハつまても人も両のたれ間なるなどまつりのゝ仏
静ふと斗いひそへいふうらいとかりくるすゝ物
のりくそほんのごくたゞ
秘蔵ーけるといのる寺三代の
待るとも仏満願揃ふてあまさ

いふを不長くて一尺ばかりある紙ふかのまきて続をゝ
葉集ふ十すの鏡とかけふみくゝ
いふを真麻の憲ゝをゝ俊頼朝臣の歌ゝそよゝて待る
まそをの糸をくりかけてと待
ゆうるゝまきもうの落とゝ誠ふ
ままをうの落とゝいふべき紙詞を暗ーるゝ色深き落ら
みくるゝゝきれるゝ古集などふ憚ふんそるるゝのれ
ど和歌のゝーひうゆうのあるゝ紙りちみふも又世の老
のとるり人普くまゝで妄ふとゞゞで

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

いえ葛豆といふ義なり花も紫なりその
名なるべし　古事記　小蔡褌といふ葛褌なり又河内の
藤井寺を葛井寺ともかけびなり
古へ葛の皮をとりて布を織るまをふぢごろもといふ
万葉集　小山田守翁が藤衣又須磨の海人の塩やき
衣ともよめり　和名集　小線衣をよめり古へきたんてそ
葛布をとりて素服とする有るをもてらまとするや　拾遺集　服ぬれ
そうるるごと河さらふもまさるあぞるなげて
万代元輔　風さやと秋とそかぜの葛の葉をうらみつつのこ世

をもふる哉
枕冊子　ふいくくそのほふさかされてうつろひと
そろくこそもる物
玉まく葛　挙白集　をりふとりつ　千載定通　やさそそ
ふるのくを野の真葛原玉まく斗ふるこれ
真くそ　真をもる辞ぞ
まくそ原　智恩院山門の南まさ叡山横川よ
ありをぐく葛の秋ひろ葉をいふべきやや　新古今慈鎮　ひが
葉も松をしぐまのそえのみてまくぞたえふこのゆ
さえとぐるのり

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

莫傳 松無草 秋ごとに花紫の松葉かるる事
さゝ玉とこそなれ蔓のちぢくさをひかりそへて松もこそぬ
それゆゑ松無がごとの義なり

奈天之古 なでしこ

草花譜曰瞿麥單瓣者名石竹千瓣者名洛陽花
陶弘景曰瞿麥子頗似麥子云〻
時珍曰案陸鮮韓氏外傳云生于兩旁謂瞿此麥之種
旁生也

爾雅 作蘧有渠衢二音葉似地膚而尖小又似初生
小竹葉而細窄其莖纖細有節高尺餘梢間生花甲野
生者花大如錢紅紫色人家栽者稍小而嫵媚有紅白
斑紅紫赤斑爛數色結實如煮麥内有小黒子
蘇頌曰苗高一尺以来葉大小青色根紫黒色形如細
蔓菁花紅紫赤色至五月開七月結實

花鏡曰洛陽花一名蘧麥葉似石竹叢生有節高一二
尺花出枝杪本柔而繁五色俱備又有紅紫斑爛者植
令苗頭無長短諸色間之開成片錦鏡有雅趣將開如
巻旗以漸舒展嘗以正午開至晩則巻明日復舒頻摘
去子則花開不絶有小黒子可種根亦可大約土肥根

なでしこ

潤則蕃（ウルホヘバフエン）色肯（ヨクシテ）開（ヒラク）但枝蔓柔脆須（ヤハラカニモロシ）用細竹扞扶（カンフス）之（ヲ）
石竹一名石菊又名繍竹（シウチク）一枝葉如（ノ）茗纖細（ホソク）而青翠夏開
花紅赤深紫數色千葉如（ニ）剪苣（チサ）結（テ）子（ヲ）細黒向（ヒ）陽喜肥（シ）毎
年起（テ）根分（チ）種（ウレハ）方茂但（シ）枝一條柔弱易（シ）至（リ）散漫（ニ）須（ク）以小竹枝（ヲ）
扶（ケ）之（ヲ）花開（テ）亦耐（タヘ）久（キ）而惜（ムラクハ）不香（カラ）若（モ）能（ク）使（メ）霜雪侵（サ）其幹（ヲ）若漸
老（オホ）亦可（シ）作（ス）盆景（ニ）分（チ）枝（ヲ）扞（テ）挿（ス）皆活（ス）

本草和名　曰瞿麥仁謂音衢陶景注云子頗似麥故以名之　一名巨句麥（キヨバク）揚玄
操音九懼反　一名大菊一名大蘭根（ノ）名紫葳華（スイクワ）名藁（カウ）已上二名出蹄
文和名奈天之古

和名抄　曰本草云瞿麥一名大蘭和名奈天之古一云止古奈豆

榮雅抄　曰花の姿あひさやうふうくく文（いろ〳〵）咲（さき）
る名子ふ半（なかば）て撫子（なでしこ）と云（いふ）さ盛（さかり）久（ひさ）〳〵けまぞ
常夏（とこなつ）とのく唐（から）のそ〳〵こ（ここ）ろ〳〵（ごころ）の深（ふか）あり大和（やまと）のでゝこい
紅梅色（こうばいいろ）なり云〳〵

驚（おどろ）きそ〳〵この花のかたちふよ
りての名なるべ〳〵
かゝなそ〳〵こ　かの國（くに）より日（ひ）
本（もと）へ渡（わた）りし事（こと）を覚（おぼ）えねをかゝみて〳〵この
花ぶぞありける

千載和泉式部　こるふ君（きみ）が世（よ）の物（もの）ふあり〳〵をらふほそこ
やまとなそ〳〵こ

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

ふもとにてやまとなでしこ 古今 これのみやあるをとおりのくさをはなたちばなのかをかしきやまとなでしこ 万 信明 大和とも唐ともえをしらぬ山賤のこまのふみしだくなでしこの花 それ 万 代 數鴈やなでしこの花 千首 肖柏 うへてこそ世よふるさとのなでしこの花 枕冊子 ふしぐ〳〵なでしこやいとめでたし 家集 忠岑 ふる葉ごとにうちなびきなでしこの花 信明 かともみぬ花のさかりをなでしこの露の枕の秋よ逢んとそ思ふ

いそほなでしこ 岩のほとふもとにおひしなでしこ 夫木 光明峯寺 いくほやいそかぬなでしこのとこなつにさくやとき月さく

移ひより〳〵

大鏡裏書 曰深殿大后少之時容姿絶麗号二髻麥御一取三美艶一耳今髻麥稱二常夏一蓋避二諱也一 今大鏡裏書をみるに見ゆるとおなじ

餘材抄 云髻麥をなでしこといふ本名なりとぞ常なつといふ異名なり常夏といふ花夏秋冬三時ふるなり 万葉 立山の雪をよめるに常夏とよめり常夏とは雪をさしていふとぞ

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426
ガラス使用

六帖貫之 そこやとも村こそふさはれびおろさそなさる
とこなつの花 やまとを床ふとりみして 古今朗恒 塵を
よふもふ〳〵とそおりのさそ〳〵よふもとろぬまれ
床夏の花

日華本草 曰瞿麥謂之石竹ト

酉陽雜俎 曰蜀中石竹有碧花

三才圖會 曰瞿麥即石竹也今以為ニ一種ト共ニ植テ周圍有リ
刻歯而有切ニ似ニ剪紅紗ニ者ヲ為ニ瞿麥ト無キニ切ニ者ヲ為ニ石竹ト

廣群芳譜 張文潛 真竹乃不花爾獨艷暮春ニ何妨児女眼謂ニ爾勝霜筠ニ世無ニ王子猷ニ豈有ニ知ニ竹人ニ絜ニ好自持時秉稱ニ此君ヲ

万葉 石竹のそととよめり一物ならざるべし
石のうへもはなぞさくとよめり

家集 俊頼 君が代の幸あれふひろみ
長日照のいしけ井ふもはなぞさくとよめり

藻塩草 曰昔ある島田の時主といふ勇士ありしが
家のうしろの山ふ一の石ありかの石せ見ましのありて人を
ろやふ次仍て時主件の石を射るにそれたちまち矢さち
ぬけどーて花さ見畢ぬ此花るそーとそうり花うさるうりて
さくとそうり

金のぜよ 今の銭ハ金銭花ふやと覚ゆるど瞿麥ふ

よあり　夫木 源仲正　なゝくひあけぬ岸が下ふかくせどもこゝ秋の残の花ぞやうまさぞ

藻鹽草　日ゝゝゝくさ

莫傳　かさゝ草　昔大和國ふ人のうたのなてしこをうゑてくるゝ其後死ゝて親我子のつゝりさるなてしことゝくをゝるなりゝゝ　さてゝゝまゝいくよひのまの袖なでしこゝん　夫木 躬恒　なでしこの花さゝふりなゝ人の恋ゝゝさ時のよゝ死ゝとこ草

篠目　なつゝ草　ふる郷とおもふそゝ夏ことふなつゝゝさの袖のうまなる

角田川梅隠鞠塢居士撰

盛音集　前編 後編 二冊 ふゝむゝや 板

江戸諸君子の詩をゝゝゝあつめし秋芳園展観目録　全　西村源六板

東都諸先生の名をゝゝゝ記せし幸なり

棋屋花品　小冊

隅田川名所繪圖　一枚摺　みゝ村源六 梅や幸之助 板

秋野七草考　同

梅隠菊塢居士撰

角田川両岸行　繪入三冊　西村源六板

草木花品　三冊

草木養春夏秋冬花の形紙記せし幸なり　近刻

特 1
2426

国立国会図書館　タイトル『秋野七草考 2巻』 請求記号 特1-2426

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『秋野七草考 2巻』　請求記号 特1-2426

ガラス使用